

稽古する身体と純粹経験

鑄物美佳（明星大学）

「純粹経験」が『善の研究』における鍵概念であることに異論の余地はないだろう。それは主客未分の直接的な経験であり、「物我相忘じ、物が我を動かすのでもなく我が物を動かすのでもない」と言われる。本発表では、この純粹経験を、稽古という場面において考えてみたい。

なぜ稽古か。純粹経験を説明するために西田はしばしば例を挙げる。そのすべてではないが多くが、身体技術に関するものである。曰く、「断崖を攀ずるとき」「音楽家の熟練した曲を奏するとき」「画家の興来り筆自ら動くように」「すべて我々の熟練せる行動においても」「我々が或一芸に熟したとき」など。たしかに、ヘリゲルの弓術や伯牙の琴慣らしを思えば、そして伯牙に関して井筒俊彦が述べていたことも思い合わせれば、そのような達人における無心の境地が、西田の言う「物我相忘じ」た状態であることは想像に難くない。

しかしながら、純粹経験はそのような身体技術の達人にのみ生じるものではない。それはすべての人にとって唯一の実存であり、原体験であるはずである。では、なぜ西田は上記のような例を挙げるのか。また熟練者におけるそれと非熟練者におけるそれは、どのように同じで、どのように異なるのだろうか。このことを問うために、稽古という場面を設定し、稽古の段階が進むにしたがって意識に生じる変容を、純粹経験を軸にしながら考察したい。作業を通して、純粹経験を、抽象的な身体一般ではなく、具体的身体に即して考察することを目指す。

明らかになるのは、およそ次の通りのことである。初習者が一生懸命稽古に打ち込むときと、熟練者が稽古に打ち込むとき、この両者の違いについて、『善の研究』における西田は、程度の差を認めつつも、基本的には同じ純粹経験として捉えるだろう。また稽古そのものは、この時期の西田においては意識的（確認しながら動く）と無意識的（動くに任せて動く）の往来として考えられているようである。しかしながら、実際には、初習者と熟練者とは、意識の統一範囲が異なる。熟練者の身体に蓄積されている時空間の幅は初習者のそれにくらべて広く、その身体が捉えうるものも大きい。稽古は意識的と無意識的を往来しながら、この統一の範囲を深めていく作業である。語弊を恐れずにいえば、稽古において純粹経験は更新されてゆく必要がある。しかしこの稽古する身体に生じる微妙な変容を描くには、後期西田哲学が積極的に取り込もうとした習慣の問題を考慮に入れる必要があるだろう。